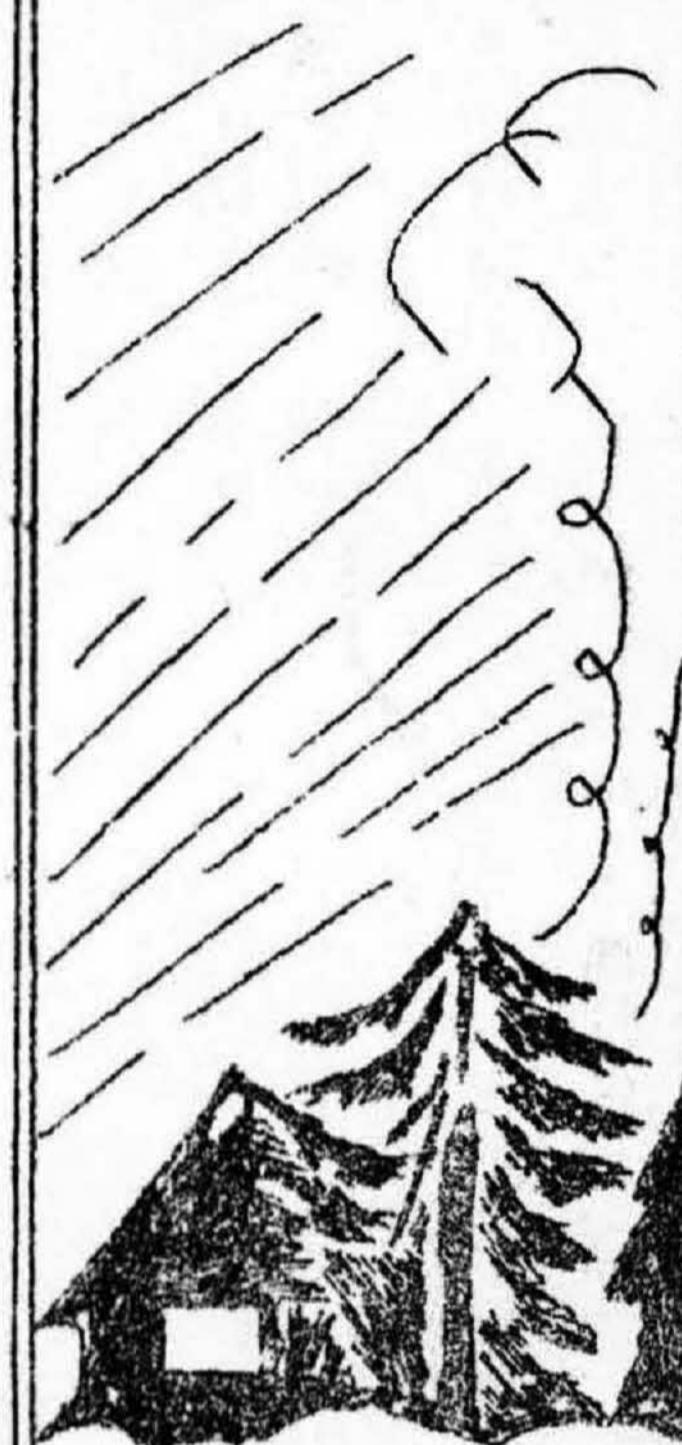


十一月一日神奈川縣出張最後の日大今まで東京から見て許り居た久慈(?)の大山へ登る機会を得た。義毛へと云つても大概知らないと思ふが又は小田急大森野駅から北方約二里の所にある稍忘れられた様な部屋で会社の用事で丁度此處へ来たのだ。大昔は此處から登った人も多かつたと見えて坂道の両側に可あり古びた宿屋だつたらしい家がある。中でも龜屋と云へば遠方にまで聞えた家らしい。然し今はこの家も落ぶれてしまつて僅かに残された面影によつてその昔をしのぶ許りである。夏の廿日間位以外は宿をしないといふ所を無理に泊めて貰ふ。それでも湯は大て、呉れた、物凄じい平地ではとても口に造入らぬ様なおかずでめしを済ませ勿々にして大時頃ねてしまふ。翌朝(一日)大時一寸前に起きたのだからよくも寝たものだ。

## 相州大山(雨降山)

## 會報



第二年二月九号

トランクを龜屋の子供に祥願つて貰ひ自分はレインコートだけ持つて行く。入海へ行つた時とは雲泥の相違だ。はいてるもの、但し帽子は大阪でトンちゃんの真似をして買つた一円五十銭のソフト。入海の時、是神社靴だし洋服だつて流行のさきかけも尻當て兼になつたのはいやしくもボルサリノのパリ／＼だつたんぜ。コンチヤンの所有物のすべてとはわけが違ふ。鬼に角い、お天気なので氣持方がいい。登るに従て見晴しがよくなる。こんな日が入海の時、一日であつたらなあと思ふや切なり。伊豆の天城から箱根の下ニ子、上ニ子へ後者は神山と駒を指すらしい「明神金時」、それから離れて愛鷹連山、富士、近くは丹沢山と云つた具合、登路は秦野圓溜で義毛から阿夫利神社拜殿へ通じてゐるもの。三角点入ニ六・四米窓の東南百米突下にある岩の記号は「雷岩」といふ。義毛から頂上へ二十八丁目)まで五十五分。三等三角点は神社の北方裏にあり。西北側に「丹沢アルプス」遠望といふ立札があつた。立札の文句は兎に入らないが實際眺望はいゝ。東側に廻ると方角の刻つてある白の様なものが置いてある。江ノ島が光つた海に浮いてゐた。遙くは霞んで見えなかつた。

歸路は頂上、拜殿廿八分。拜殿から鎧々の終りまで両側に架るケーブル。大山町端丸まで十町位。こへで乗合バス、伊勢原まで卅五錢（但し切符は五十錢とある）。

大山登山は私のやつた方が往復とも同じより面白いと思ふ。大藪野糸毛間乗合（廿五錢）。

この日伊勢原から小田急綱多摩川まで、こへで南武にのりかへ清ノ口下車一件調査をして電車に乗つたら後からコンチヤン御夫婦にバツタリ出遇ふ。くされ縁だな、全くお互ひに悪い事は出来ない、御一縷に御伴したかったが二子に用がある

（熊）

十月十七、十八の連休を利用して出掛けた魚沼三山カギリは三日間とも完全に霧の旅だつた。要するにやんと一緒だつたら豪雨になつたらうといふ説もあるが、眞偽の程は保証の限でない。今度の山行が上越国境からヒントを得たことは無論であるが私たとつては卒業以来五年振の大規模な旅行であり、相手の面々は針葉樹会に其人ありと知られた然さん、ベンチやん、近ちやん、それには新進宇佐美の諸君などから実は興味六分、恐怖四分、平素トレインングは相當してゐる積りだが防寒具、食料品其他を満載した四貫目をあらうと

霧の三嶽廻り

いふ荷物を背負つて、果して彼等豪の者と一緒に大連続三日の山行に堪えられるかといふ娘になると全くホアン・ダンテロガシオンであつた。が無事どうやらやり了せたのは天の助か同行諸氏の友情か實に有難き仕合と申す外ない。そこで謝恩記念に印象記を書かうといふ記である。敢て印象記といふ。若しそれ三山の一木一草をもゆるかせにせざるニースの詳細掌を指すが如き「登高記」に至つては熊さんの司る所であるから。

水

三山を通じ、水は実に豊富であつた。八海山は六今日まで水があり、六合の小屋の西側直下にも氷の様な水がある。五龍の池、祓川凍頭、中岳頂上の三池、駒ヶ嶽今日の池、小倉山との中间の天ヶ池に至つては清別岩清水を凌ぎ、其附近の平雪の期間が長いためにかくも山頂近くまで池があるのだらうと思ふ。残雪といへば北俣川の本谷にも、支谷にも驚く程豊富な残雪があつた。

鑑

車窓遙大八海山の八峯を望んだ時は成程鋸の様な岩峯の連続だなと思つた。實際さしかつてみると聞きしにまさる變底岩山鏡さで、その鏡の峯に頭を蒙きすかして仰ぐ心持は丁度南北の山水画に対する様な気分だつた。例へてみると妙義の大観

礎になつた形である。講中の登山者の安全を慮つて険しい登攀とか、危険なトラバースとかの箇所になると大抵鎌がかゝつてゐた、無くともすむ処が多かつたが、大日岳の登りと降りとは無くては一寸困る様な所だつた。中の岳の九合目にさしかつて夕暗迫る中を手探りで鎌にすがつて登つた時は悲壯な気分だつた。

## 岩壁

中の岳七今日及駒ヶ岳七今日附近の岩壁は殆んど直立に近い兎美な一枚岩でまるで大阪城の石垣を見下す様だつた。此内縁岩の天然石垣の端は霧にまじい水音をきいて三國川渓行は到底不可能だと直感した。地図で見ると駒ヶ岳の頂上附近はさばららしい岩場となつてゐるが五里霧中の一行は我念ながら其美景に接することが出来なかつた。

## 跋

今度のコースには鞍潛りはなかつたが、小倉山、枝折峠へ明神峠へ向は全く根曲り坂の連続で、切開はあつても足許は殆んど恩典に浴せず、しかも左山ばかり。三日目の疲れた足には火を乗り越え、跨ぎ越えろことが一苦労だつた。長期に亘る多量の積雪のために開東の鞍には見られない曲り方をしてゐるのだらうと思ふ。

## 天幕

今度の山旅に是非天幕を持つていけと頑張つたのが私。眞新らしい大人用天幕を供給してくれたのが三井鉱山旅行部へ?」を牛耳る近ちやん。殆んど三日間背負通したのが宇佐美の敏坊。御茶で一等大通任証を下附された後は秋川露營の夕食の後で、敏坊が水汲に行かされた。が熊ちゃん江口君に説明して曰く

「山へ来るとき水汲んで来いなんて大分先輩面だが、木ツケーにかけちや天下の第一人者なんですぜ」

江口君、びっくりして

「アレガ、アノ人が、あの木ツケーの名手宇佐美君ですか?」

さて、愈々寝る機になつて並び方の鐵引、山側から谷へ近藤、吉次、中川、江口、村尾、宇佐美、うまい順序にいったもんだ。が両側からの圧力で私は寝返ることも、手をあげることも出来ず、少しのことでは寝返されざる所だつた。(七八共衛)

## 「熊さんトリック」

ベンチやんと散々日曜日愛鷹山へ行く相談をして初めて愈々二三日に迫るとベン公の決心が一寸純化した。どうですね、午后五時退会社へ電話を通して今晚十一時半出発だ、用意はよいかと未だ。餘り突然

ではあるが而かも今晚は歸宅後親戚と外へ訪問せねばならないが十一時半なら何んとか出来る。よし行かうし急に嬉しくなつて電話を切つた。处がだ、もの、十分も経たない内にベン公から又電話がかゝつた。

「モシ／＼コンチヤンですか十一時半の汽車は函館駅に停車しないんだつて、今要ちやんが来て調べてくれたんでね、十時十五分に乗るんだよ」  
「ウリ一時半のでもやつとの事だのに十時十五分とは情けない。え、面倒臭い行かう。然し万ヶ一に其時間遅に行けなかつたら残念だがあきらめ様」と電話を切つて初て今晚は親戚だけで御免被つてと考へたが何しろ退社後一直諒に歸宅しても七時になると、七時半迄に夕飯を食べて出掛けで見たとしても十時十五分では何んとも予算が立たない。うらわしいのはフベン公だよ。

さて最後の電話の時、熊さんが行かうと云つて来たんだよ。今日千葉から歸宅して熊さんも行くんだよ、とあつたから愈々断念したが六時一寸前だつたので行けないと云ふ事を傳え様と思つて熊さんの方へ電話をかけて見たら驚いたね、

「一部さんはまだ千葉からお歸りになりません、あなたどなたですか、あ、近藤さんですか、是れが熊さんの家の返事である。

是れには流石の我輩も茫然としたね、ベン公の言が眞なりとせば此の返事に出た御婦人の言や非眞である。

此の御婦人の言や眞なりとせばベン公の言や非眞である。

僕は此時考へたね、いや／＼苟しくも紳士と呼ばれ淑女と呼ばれるお方に虚を云ふ理はない。是れは兩者ども眞である。

初ては熊さん、家には未だ出張中の事にして旅行先で後鷹山に登るんだな。

それにしてもあの立派な背廣のまゝ登るのだから、は、出張する時既に持参に及んで居るのだが、うか、あの立派な紳士用の靴のまゝ登るのだらうか、是れが僕の推測であつた。

初て諸君よ!! と僕は云ひたい。此の推測も当ては居なかつたのです。然らば此の行掛りの真相は那辺にありや

次号に於て真相をのせる事にする。

何んと針葉樹會員諸君よ、此の不可思議なる事件の真相を次号会報上に於て解いて下さらん事を、

六、九、二七、(續)

### 谷川岳行

久しく山に遠かかつてゐたのでへたもその間軍隊で富士山に登つたことがあらが、七兵衛もどき

の健脚を誇りとしてゐた我輩も少々危惧の念を抱いてゐたが、谷川行の結果から見るとまだ／＼決して凡百の山党に負ひざるの自信を得たことであつた。

西黒沢は小さな明るい水量の渺い沢で、何処を歩いても困難を感じる様なことはない、一、二丈の小滝が二、三あつた様だが、登行には一向支障はなかつた。

西黒沢から尾根へ取付く箇所は成分解り難い、谷が急に広くなつて中央にデルタを形成してゐる處へ小屋跡といふから左岸を攀ぢるのである、尾根上に出るまで殆んど真直ががう／＼したから、沢である。石を落すと後から登つて来る奴は頗る危険である、此の中程から西黒沢の下流を見る谷の間で丁度武尊山が現はれる。

谷川岳の附近には岩壁の見事なものが多い、高

山植物は乏しい様だ、

谷川岳の北峯から更に北へ十分許り傳ふと、岩蔭に武力張りの一抱へ程の箱型の小社がある、何処かの奥社だそだ、誰か教へて下さい。

天神峠道と西黒沢道の合する處へ谷川岳へ僅かに五分の處で白パンキ塗の木標がある、此處から天神峠へ降る道は霧でも深かつたら仲々判然しないだらうと思はれる。

十月十八日だが紅葉は千米以上にのみ見られた

谷川温泉辺では来月初旬が見頃だらう。  
湯檜曾駅を午前五時半に立つて水上温泉に灰つたのが午后四時二十余分だ、此の位の時間で谷川岳へ行つて來るのは愛妻帶で結構出来るから諸兄にお薦めする。

（一九三一、一〇、三一）（平家蟹）

### 大山行

大山ふんで山の内に入らぬといふだらう、そんな奴は大抵大山へ登つて見ないこと請合ひ、十七日会社の連中と行つて見た、小田急の伊勢原から大山町までバス、大山町を歩いて通りケーブルに乗る、ケーブルは神社まで連れていつて呉れ大、神社裏から有名な石碑を登る、江ノ島が見え、伊豆半島がすっかり見渡されただらう、尾根に出ると頂上の社が見える、石燈を登つて行くのが如る、頂上の裏側の兎崎から舟沢が額を压する様に聳えてゐる、地図に括げて見る様な興味ある山は附近にないから至つて春氣なものだ、薄帶した汽車券を聞いて食ふ、小田急が目の下に走つてゐる、その形が又代表的な金字形だ、大山町から往復三時間

予定おしの日曜の暇潰しには好適の処だ、余り馬鹿にしないで行つて見給へ。 (平家蟹)

## ロンドン便り

御無沙汰致しました、其後新しき御生活は如何ですか、私も幸ひ元氣で目下ロンドンの下宿住みを致して居ります、毎日見物がてらショーウイングー観きを日課として歩き廻つて居ります、何しろ世界の商業都市、大変な賑かさで、流石の銀座子も、かう田舎者扱ひです、それでもどうやら地下鉄の系方、バスの方向等分つて来ました、兎に角巴里の方が一般に気分は満点の様です、それで又、

七月二十七日

森竹生

松木謙三様

## 霧。岩。紅葉。

八海山から駒ヶ岳へ

始めから霧に恵まれた旅だった。尤も、妙なものに恵まれたものである。昨日が五里霧中だつたら今日で十里霧中だ、三日間歩いたら何里霧中になるかと云ふのも詭怪自身とりとめのないものだ。

八海山大崎口一合目のお社で休んでる時、神主

が「お祓ひしませうか」と云つたら一ちゃんが「では一つ簡単にお祓ひします」。大人がスマッと並んで、かけまくも尊き神々があるものの罪穢れ深きものを祓ひ給へ清め給へとまをすしでサラツサラツと神を振つてお祓ひが終る。これで罪穢れはない筈なのに毎日こんなに天氣の悪いのは、さては、誰かの罪の深さよ穢れの多さよと思はざるを得ないぢやないか。

殊に八海山からの一日は酷かつた。前も霧、坂も霧、見えるのは登らうとする直前の一峰、これから降らうとする急な傾斜。それだけが見えるのだった。下を見れば千仞の谷であつたであらう所も平気でへつたかも知れないし、天気がよければ鋸の歯の様に聳立して見えるであらう連峰もただ一つく気軽く片附けて行けばよかつた。「頂上には日の池・月の池」からやがて紫檀黒檀夕がヤサンとなり蝦夷の油でも費出しそうちが口癖大云つてた八つの池。こっちも真似て日の池月の池が、火の池水の池と合理的な出だらぬを云つてると近ちゃんが「日の池・月の輪へだ。」と云つて樂しみにしてたその池が一つも見えず終つてしまふ。下で聞いたら尾根筋にはなくてすぐ下にあるのだそうだが、あ

の霧に蔽はれてはれでは日月も為に暗かつたのか  
も知れない。

八海山は信仰の山。人々の峰の上には鐘が吊してあつて鳴らすに任してある。殿リストとしていつも一聲後からくつついで行くと先に行つた連中がカンカーンと鳴す音が柔い霧の中を鏡く切つて響く。昔江戸の花曇りの空に響く鐘は上野か浅草か鬼に角、睡りを催したらうが、此處では霧の中を無人の山中に鏘然と鳴つて神氣を澄ます。霧一霧一霧。リンドバーグは何と書くだらう。

二.

岩は内縁岩か凝塊岩かそれは知らない。だが山がけはしく急なのはまだ壯年期の地形を思はせる。その岩の瘠せた峰々を纏じ一つ／＼越して途は行く。途ハタと極まつて壁にヅツかると鐘が下がつてゐる。『相當のもんだね』と云つて一つ越す。また一つと又一つ。『相當のもんだね』又越す。また一つどれだけ鎖があつたか。鬼に角面白い。

七

「余計なことをしたもんだね。」  
八海山の小舎を今日は岩場が多いと云ふので草鞋にはさかへて出る。先頭に巻脚絆、足でしらへも甲斐甲斐しい探さん。因縁付の石楠の枝を小脇にかいこんで岩壁の下を紅葉を踏んで霧に惚れて行く所なんか一寸、國定忠次赤城落ちて氣持がすろ。後に續く面々、何とかの岩鉄とか日光の円藏とかつてのに劣らぬ凄い面構へで、末は何處に落ち行くか、井定めぬ旅鳥、へ此の所、トーキーならば断然浪花節を入れろ」と神妙に八海山落ちをやつて行く。知らず杯長二郎演ずる所の板割の浅太郎ありやなしや。

始めは八海山を朝出て、中、駒を越えて向ふの池で泊る予定だつたが、一つ／＼峰を越してみて案外時間がかゝつて、先づ駒を越す予定を放棄し、次に中を越すのも危くなり、遂に中の岳の手前の祓川泊りと云ふ事になる。夕方五時、まだ祓川につきそうもない。五時と云へばこの天気ではうす暗い。男子志を立て、郷閑を出でたとは云へ、こちの霧の中で、瘠せ尾根の右も左も削り立つた様な尖端で安眠しようとは夢にも思はない。自分で歩くんぢやない。情力で歩いてるんだと云ふ様な物にとつちや余り有難くない忠告だ。それでもそこを越すと詰が大きくなる。

「どうも鎖があると邪魔だね」。  
つどうも鎖があると邪魔だね」。

の朝に及んで又岩かと立志出郷閑がまた一しほ心細くなつたものだ。その代り板川は僻麗な草原だつたし、そこの岩を深く切つて流れる水は尾根近くとも思へぬ豊富な量のある好い泊り場だつたのは嬉しかつた。

## 三、

岩を見ると闘争の気が起る。

霧には憂愁の影がある。ではドッカと腰を下して懇ひの眼は何を見ろ?、霧に遠く眺めを限られては近く岩に點綴する紅葉の綾の糸を讀へるばかりだ。紅葉だよりに奥利根水上が三分、赤城山が何分妙義山が何分とあつたが、一合目から二合目と上るにつれて三分が五分、五分が八分。やがて見頃で二月の花よりも紅の色が滴り、黄葉は映える。

女人堂の少し下、尾根隔稍広くなつてゐる辺り山毛櫛か、樺かの下行く途はほの明るかつた。それも晴れた日の明るさと違つて紅葉は霧に濡れてつやつやしく、霧は紅葉と映えて總やかな光を散らしてゐるのでつた。

一枚岩も過ぎて道も一寸衆になつて休んでると真赤な葉・樺かと聞けば「樺は南国の樹だから漆だらう」と云ふ。樺にしき漆にしき小さい時から漆かぶれ易い自分だが(エエ、至つて面の皮が薄いんですよ)。あの葉に触れば血の様に赤い汁

がタラ／＼と流れて触れた皮膚が腫れ上つて一と思つた丈けで身体がゾク／＼して、ほんとうに、もうやられてしまつたんぢやないかと心配してその夜メンソレータムを額に塗りこんでねた。起きて見て別に何ともなかつたのは幸ひ、薬のき、めかそれとも皆様御交際のおかげで額面の皮膚強靭となつたのか。

駒から天池、小倉山それから明神峠への道。真赤な紅葉を五枚六枚、手折つてかざして行くは、ぬきもとりあへぬ菅家のそれならで、四谷に住ふ今七矢衛氏の、谷の中道を、笹藪の中を、散らすその紅葉は暗の夜道を兩にソボ濡れ、自動車の外で風に吹かれ、汽車の鋼棚の上でも恙なく、主人と共に無事に旅を終へたのだ。そのもみぢ葉よ。小倉山峯のみぢばよ。心あらば何と思ふか。自分は今一度の訪れをしたい駒ヶ岳だ。霧と岩と紅葉と、そして愉快な山友達とその間に起つた数々面白かつた出来事をシッカリ胸に疊み込んで。(村尾)